

AKI INOMATA 個展 「昨日の空を思い出す」のご案内



AKI INOMATA *Thinking of Yesterday's Sky*, 2022-
Photo : Asaoka Eisuke
©AKI INOMATA / MAHO KUBOTA GALLERY

展覧会名

AKI INOMATA 「昨日の空を思い出す」

オープニングレセプション

8月 25日(金) 6pm - 8pm

オープン日

本展はイレギュラーな会期設定となります。

展覧会オープン日をご確認の上ご来場ください。

8/25(金)、8/26(土) 2pm-7pm

8/29(火) - 9/2(土) 2pm-7pm

9/12(火) - 9/16(土) 2pm-7pm

会場

MAHO KUBOTA GALLERY 東京都渋谷区神宮前 2-4-7 1F

Tel 03-6434-7716

<http://www.mahokubota.com>

<展覧会概要>

MAHO KUBOTA GALLERY では AKI INOMATA の個展「昨日の空を思い出す」を開催いたします。本展覧会の会期は8月25日（金）をスタートとして9月16日（土）までの間、変則的に設定されております。

AKI INOMATA の「昨日の空を思い出す」は水を湛えたグラスの中に前日の空模様を再現する作品です。アーティストが2020年から継続する進行形のプロジェクトであり、グラスの中の液体に別の液体を3Dプリントする技術の開発を経て実現しました。

作品の構想は、コロナ禍における行動制限が日常化した中で、アーティストが自室の窓から空を眺める時間がきっかけとなりました。コロナ禍を経験するまでは、多くの人にとって明日は今日の延長であり、今日は昨日と途切れなくつながっているものでした。しかし、当たり前だった日常がまるで別の惑星の出来事のように異質なものとして現実化した時、アーティストが強く感じたのは「昨日と同じ今日は来ない」ということでした。

本展では、テーブルに置かれたグラスの中に昨日の空模様を眺めることができる作品や、グラスの様子を記録した映像や写真の作品が展示されます。鑑賞者は絶え間なく流れる時間の中での一瞬一瞬の「いま」を強く意識することになるでしょう。

<AKI INOMATA 作家プロフィール>

人間以外の生きものや自然との関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。

アンモナイトとタコを長大な進化の時を超えて出会わせる「進化への考察」、ヤドカリが世界各地の都市をかたどった透明な「やど」へと引っ越しを続ける「やどかりに『やど』をわたしてみる」、真珠母貝に小さな立体の核を挿入し、貨幣の肖像をモチーフにした真珠をつくった「貨幣の記憶」、「犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう」など、生きものと共に制作した作品を多く発表。

近年の主な展覧会に、2022-2023年「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」（森美術館、東京）、2022年「アペルト 16 AKI INOMATA Acting Shells」（金沢21世紀美術館、石川）、2022年「あいち 2022」（愛知）、2020-2021年「Broken Nature」（ニューヨーク近代美術館：MoMA）、2019年「AKI INOMATA: Significant Otherness 生きものと私が出会うとき」（十和田市現代美術館、青森）、2019年「第22回ミラノ・トリエンナーレ」（トリエンナーレデザイン美術館、ミラノ）、2019年「トロントビエンナーレ」（トロント、カナダ）、2018年「Aki Inomata, Why Not Hand Over a "Shelter" to Hermit Crabs?」（ナント美術館、フランス）、2018年「Thailand Biennale 2018」（クラビ、タイ）、などがある。

作品の主な収蔵先に、ニューヨーク近代美術館、南オーストラリア州立美術館、金沢21世紀美術館、北九州市立美術館など。



AKI INOMATA *Thinking of Yesterday's Sky*, 2022-
Photo : Asaoka Eisuke
©AKI INOMATA / MAHO KUBOTA GALLERY

<作品「昨日の空を思い出す」に寄せるテキスト：山本浩貴（文化研究者）>

AKI INOMATA の《昨日の空を思い出す (*Thinking of Yesterday's Sky*)》はコロナ禍の只中で構想され、長い時間をかけた試行錯誤の末に実現されたアート・プロジェクトである。地球環境の著しい変容が顕在化された形で現れたコロナ禍において、INOMATA が「昨日と同じ今日は来ない」と感じたことから本プロジェクトは始まったという。コロナ禍がもたらした隔離生活の中で自室の窓から眺めた空に INOMATA が発見したのは、似ているように見えても一度として全く同じ様相を示すことのない日常の姿であった。他種との協働が生み出すアートで知られる INOMATA の新作として、《昨日の空を思い出す》は全く新しい発想から誕生した作品であるように思われるかもしれない。本作が彼女の新機軸となることは間違いないが、しかし同時にこれまでの関心とも地続きであることも指摘したい。

グラスに注がれた水の中に出現するのは、昨日の空に浮かんでいた雲の形である。INOMATA が作り出す繊細な「雲」は徐々に液体と混ざり合うことで時間の経過と共に消えてしまうが、鑑賞者は実際にその水を飲むこともできる。作品（の一部）を鑑賞者が体内に取り入れができるという点は、例えばフェリックス・ゴンザレス=トレスの《無題（偽薬）》（1991）などを想起させる。エイズで他界したパートナーと自身の体重を合計した重量のキャンディーから成るこのインスタレーションは、そのキャンディーを鑑賞者が体内に取り入れることで芸術を通して集合的に共有された哀悼を構成する。INOMATA の《昨日の空を思い出す》もまた、コロナ禍が浮き彫りにした過ぎ去りゆく日常のエフェメラルさや日々のかけがえのなさを共有する装置として機能している。

非人間生物との予測のできない協働により生成される芸術作品を通じて、INOMATA は近代世界における無二の原理として霸権を握ってきた人間中心主義に異を唱えてきた。「食べる」という行為を軸とした《昨日の空を思い出す》のプロジェクトでは、同じく近代世界——とりわけ、近代美術という領域——を王のように統べてきた視覚中心主義へのラディカルな挑戦をはらんでいる。目で楽しむだけでなく舌で味わうこともできるこのプロジェクトのアウトカムは大胆にも、芸術において偏重されてきた視覚をそれが長らく居座っていた玉座から引き摺り下ろす。同時に人間の視線を中心据えた世界の見方を再構成し、あくまで人間がその一部でしかない世界に想像を馳せるエコロジカルな契機となるだろう。そのような意味で、このプロジェクトは AKI INOMATA の芸術実践におけるこれまでの関心とも深い部分で共鳴している。さらに言えば、生物以外の自然現象を扱っていた INOMATA の最初期の作品とのつながりを見出しきることもできるだろう。

創造性を発揮して混沌とした社会をどうにか生き抜く自立した個人を理想的なロール・モデルとして想定する新自由主義的な世界の中で、私たちは常に「未来」に目を投じているように強く促されている。そうしたアントレプレナーシップ（起業家精神）の過度な称揚に際してポジティブに引き合いに出されるのがアーティストやデザイナーであったことは事実だが、アートは本来的に立ち止まって物事をじっくりと考えるために焦って早足になる私たちにスローダウンを可能にする営みではなかっただろうか。AKI INOMATA がコロナ禍をきっかけとして開始した《昨日の空を思い出す》のプロジェクトは、日常的な（一見したところの）反復の中に重要な差異を見いだすことずっと先の「未来」だけではなく私たちが立っている「今ここ」に注意を向けることを促す。それこそ、《昨日の空を思い出す》の「今ここ」における意義であると言えるだろう。

<広報用画像>

広報用画像をご提供いたします。

ご希望の方は、使用条件をお読みの上、今井(info@mahokubota.com / 03-6434-7716)までご連絡ください。

[使用条件]

※広報用画像の掲載には可能な限りアーティスト名及び、カメラマンクレジットの明記をお願い致します。

※情報確認のため、お手数ですが記事の掲載前に校正原稿を今井までお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどを今井までお送りください。

ご理解、ご協力のほどどうぞよろしくお願ひ致します。